

で活躍を続けておられます。

下館一高が、時代の求める人材を社会に送り出し、この県西の地で営々と築き上げてきた実績は、伝統となつて在校生にも脈々と受け継がれておりますが、創立九十周年の節目を迎えて、全日制普通科のみを有する高等学校となつた今、過去の本校がもつてつたように、次代に向けた新たな目標を持つべき時が来たのだと思つています。県下に進学校と呼ばれる高校はいくつもあつて、本校でも出口としての進学を目指して生徒の指導に当たつております。しかし、生徒諸君にはそれだけではない何かを身に付けて本校を卒業してほしいと思つています。その何ものかを身に付けさせてくれる高校として、保護者や地域の方々から信頼されることが学校の特色であればと思います。

高等学校の目標は自立する人間を育てることにあり、自立するとは岐路にあつて正しいと信じる選択のできる自己をつくり上げることです。日々の教育活動を通してそのような人間を多く育てていくことができれば、学校としての存在意義を将来にわたつて示していけると考えています。

〇進路指導は、生徒一人一人に自己の適性を発見させるものとなつてゐるか。

〇生徒指導は、生活指導を含めて心の成長を助けるものとなつてゐるか。

〇特別活動は、生徒会活動各種の行事或いは部活動を通して、自主性を育てることができているか。

〇そして、生徒は、本校卒業時において、自分の前にある困難な課題に対して、逃げずに解決しようとする意志と姿勢を示せる人間に成長しているか。

常に自問自答を続けることで、自立を目指した本校の教育活動が「それだけではない何ものか」に繋がればよいと思つています。そして、卒業生が誇りに思える学校としていくことが、今後、創立一〇〇周年に向けてなすべき、在校生と職員の使命であると考えます。

生徒諸君、君たちには、今後とも日々努力し成長する姿を見せて欲しい。本校卒業生の一人として大いに期待しております。

最後に、永年に渡つて本校

を支えていただいた総ての方々に感謝申し上げます。今後とも変わらぬご支援をお願いして、式辞といたします。

継承していくために

生徒会長 中川 奏美



我が校は今年で創立九〇周年を迎えました。進学校と呼ばれている下館一高ですが、平成二五年度の大学合格実績として京都大学への合格者がでるといふ功績を残しました。しかし、勉強面だけでなく、部活動にも注目していただきたいです。硬式野球部が第六六回秋季関東地区高等学校茨城県大会において三五年ぶりのベスト八進出を決めたり、

軟式野球部が第五四回秋季関東高等学校軟式野球大会茨城県予選会において、第四位に入賞し、二〇年ぶり九回目の関東大会出場を決めたりと、様々な部活動が活躍しました。勉強と部活動を両立し、さらに自分たちの手で行事を盛り上げ下館一高を作っていくことが、九〇年間受け継がれてきたよき伝統だと思つております。今度は、私達が、この伝統を継承していかなければなりません。今、自分に出来ること、自分がやるべきことをみなさんで考え、実行し、さらなる下館一高の発展に繋がっていきます。



Ⅱ 記念講演 Ⅱ

『館高生へのメッセージ』

講師 谷 島 賢 二 先生

(第四十三回卒)

東京大学名誉教授・学習院大学教授



(講演抄録)

報 会 西 紫

本日はお招きを頂いて若い後輩諸君の前でお話をする機会を与えて頂き、有り難うございます。私は昭和三十九年(一九六四年)四月に館高に入學、昭和四十二年(一九六七年)の三月に卒業いたしました。今年が九〇周年ですから

ほぼ館高の歴史の折目目に在学していたことになります。当時は工業科が独立して間もない頃で、商業科と普通科五五人の四クラスずつ、二二〇人ずつ、夜間の定時制からなっていました。現在は普通科のみという具合で、校長先生から説明があったようにこの間さまざまな変遷があっ

た訳ですが、館高は九〇年にわたってこの地域に、日本の各地に、また世界の様々な地域に優れた人材を輩出し続け、この地域や日本の、また世界の様々な方向への発展に寄与し続けてきました。現在もこの地域を代表する高等学校として優秀な卒業生を毎年世の中に送り出しているのでありまして、これは特筆されて良いことだと思います。あらためて九〇周年のお祝いを申し述べたいと思います。

私の年代はいわゆる団塊の世代、戦後のベビーブームに生まれた世代で、同一学年の人の数が二六〇万人もありました。おかげで、私たちはいわゆる受験戦争の最も厳しい時代に高校生活を過ごすことになりました。現在の高校三年生が生まれた平成一〇年の日本での出生者数が二二〇万三、四七人だそうですから、私たちが高校三年生のときは現在の倍以上の高校三年生がいたことになりました。受験の厳しさが想像してもらえらると思いますが、実力試験の結果が成績順に廊下に張り出されたりして、なんかいつも尻をたたかれていた気がいたしま

す。また、東京オリンピックが開かれたと言っても、今と比較すればまだ世の中は貧しかった様に思います。たとえば農家の子供の多くには、家の中に勉強する特別な場所はなかったと思います。それで、私たちは放課後や日曜日には、当時校庭の端にあった木造の校舎の教室を勝手に拝借して勉強をしていましたが、いつだったか当時の校長先生がお見えになって、電気代がかかるなど我々の前で呟かれたのを記憶しています。そんな時代でした。と言うことで、あまり余裕のある高校生活と言う訳には行かなかったのですが、それはそれなりに楽しい時間でもあったように記憶しています。

実はこの場で何をお話しすべきなのか、ごく最近まで悩んでいました。悩んでいても私は所詮数学者なので、結局「数学はとても役にたつのだ、科学はとても役に立つのだ、一般に学校で習うことは役に立つものなのだ」という話をしようと言ったことには少しも、といったのも、今の大学の学生をみると、数学は試験のために勉強しているのだと

考えている学生が多いように見えてならない。そのため試験の前になると一生懸命に試験に出そうなところを覚え込むのですが、試験が終わるとすべて忘れてしまつて、二年生の授業を聞くときには、一年生で習ったことを殆ど覚えていないという悲惨なことになっている場合が多い様にみえるからです。これは本当にもったいない、時間の浪費というか人生の浪費です。これは数学も含めて学校で習うものが役に立つもので、学ぶことが楽しいことだとは思っていないからではないか、従って、普段はあまり時間をかけずにいて、試験の前だけに勉強するということをしているからではないかと想像している訳です。どんな学科の勉強も同じだと思いますが、数学は時間をかけて、自分で多くの問題を解いて見て、解けた時の快感を味わわないと、意欲も沸いてきませんし、決してできるようにはなりません。

「ずから通ず」と言いますが、何回も繰り返すことによって、一つのことを様々な新しい角度から考えることになって理解が深まるのだらうと思います。このように忍耐を要することを実行するには何かを知りたい、あるいは理解したいと言う、いわゆる強力な知的好奇心をもつことが大切ですが、そのような好奇心を持つために、学ぶことがとても役に立つことなのだと思えることが大事なように思います。そこで数学が本当に役に立つものだと言うことを皆さんに少しでも確信して頂くように思つて、以下の話をしようと思います。

数学は科学を記述する言葉です。従つて数学が分からないと科学の殆どは理解できないのです。そう言っても数学が活躍している場はなかなか目に見えないので実感は沸かないのではないかと思います。いくつかの例を申し上げましょう。なにが身近でしょうか？まず諸君が今勉強している、あるいはすでに勉強することになる、微分と積分と、物理を例に取りましょう。物理でならう物体の運動は、